

ジュビリー

松浦 純子

ローマに行く最大の魅力は短期間で多くの教会を見られることである。祭壇、天井画、そして側廊にある絵画、彫刻……どれも美術館の作品以上の芸術品である。昨年十二月に神社・寺の国からモスクの国の飛行機で教会の国へと向かい、三十近くの教会を巡った。

昨年はちょうどジュビリー（聖年）だった。これは一三〇〇年に教皇ボニファティウス八世が始め、当初は五十年に一回の行事だったが、百年後には二十五年に一回に変わり今日まで続いている。ただし前教皇は二〇一五年にも行った。聖年は、表向きは信者がローマに詣でて神の許しを求めることだったが、ボニファティウスはローマに信者が来れば教皇庁の財政が潤うと考えたからだと言われている。

聖年の開始と共に教皇は大聖堂の聖なる扉を開け、許しを求める人々はその開いた扉を通して聖堂に入る。二十五年に一回しか開かない、じゃあ次は二〇五〇年だ、生きていたとしてもローマに行くのは難しいと思った。中世から続く行事がどのようなものか、今回も実際に体験したいと思いついての大聖堂に出向いた。周りを見た感じでは、物見遊山的な人もいた。

サン・ピエトロ大聖堂前の広場では、十二月二十日に聖年最後の土曜日の教皇謁見があった。「最後の」と聞くと逃すわけにはいかないという気持ちで働き、これに参加した。さすがにこれには各地の教会から集団で参加していた信者が多く、熱気にあふれていた。

教皇が白い専用車で参加者の間を回ると、「パパ、パパ」の声とともに一斉にスマホがかざされた。謁見はほとんどイタリア語で話が続き、最後の方に英語に変わった。そして「特にアメリカから来た人に祝福を」と言うと、アメリカ人は大興奮だった。話の中では何回も *adoro* という語を使い「希望は生み出すもの」と繰り返していた。神社・寺の国の人もモスクの国の人も皆そうだと思っただろう。

前教皇の人氣はまだ続いており、S. M. マッジョーレ大聖堂内のお墓の前は交通整理が必要だった。